

基調講演 シンポジウム 演題一覧

【基調講演】

「ヘルスコミュニケーションにおける コミュニケーションとディスコミュニケーションの相互作用 －医療情報のあり方の観点から－」

講演者：石崎雅人（東京大学大学院情報学環 教授）

座長：木内貴弘（東京大学大学院医学系研究科
医療コミュニケーション学分野 教授）

9月21日（土）12:30-13:40

医学部1号館3階講堂（A会場）

現代社会においてコミュニケーションは、その重要性が繰り返し指摘されている。他方、この言葉はきわめて多様に使われており、その内実や有効性について批判がある。このようなコミュニケーションへの対立する捉え方は、医師と患者のコミュニケーションにおける意思決定に関して提唱されている shared decision making (SDM) においても見られる。SDM については、概念的に患者中心の医療の一部を成しており、臨床的な観点から実証的な知見が蓄積され、倫理的な観点からインフォームド・コンセントを具体的に実践する手続きを示していることと捉えることができるが、必ずしも多くの医療現場で活用されるには至っていない。Légaré and Thompson-Leduc (2014) は SDM に関する認識の誤解を挙げているが、まさにそれらが実践の障害となっており、現在でもさまざまな診療分野でその活用の問題点が議論されている。

コミュニケーション研究者のジョン・D・ピーターズ(1999)は、コミュニケーションに関する哲学を歴史的に辿り、コミュニケーションにおける他者の問題を消去することなく、社会への参加としてのコミュニケーションの可能性を保持できるコミュニケーションとは何かを探る。きわめて粗い対応づけではあるが、前者は、現代社会におけるコミュニケーションに対する批判の根底にあるものであり、後者は、コミュニケーションを推進する基盤となっている。彼はコミュニケーションの条件についてテオドール・アドルノを参照し、述べている。脈絡は異なるが、それは、ジョン・デューイのコミュニケーション論への鶴見俊輔の批判である「コミュニケーション-ディスコミュニケーションの両者のダイナミックな相互作用において、理解し、両者の現在の『均衡』状態をぼくたちみんなの利益にむかって一分なり、二分なり改良すること」（鶴見 1952:168）とつながっている。本講演では、彼らが示したコミュニケーションの可能性について、ヘルスコミュニケーションにおける医療情報のあり方の観点から検討したいと考えている。

基調講演 シンポジウム 演題一覧

【シンポジウム1】

「医療における対人コミュニケーション研究のアプローチ」

9月21日(土) 13:50-15:20

医学部1号館3階講堂 (A会場)

ヘルスコミュニケーションの研究の中でも、医療場面における対人コミュニケーションの研究は早くから、さまざまな分野の研究者によって行われてきた。本シンポジウムでは、異なる方法論的アプローチと研究デザインをとる医療コミュニケーション研究が、それぞれどのような理論的背景に基づき、何を明らかにしようとしてきたのか、日本における実証研究をもとに議論する。

一方で、日本発の医療コミュニケーションの実証研究の論文は少しずつ蓄積されてきているものの、まだそれほど多くない。医療における対人コミュニケーション研究を計画、実施し、研究論文として発表していく過程における難しさ、留意点などについても論文著者としての経験を踏まえて共有していただき、今後の日本における実証研究とその成果の発信を後押しできるような議論もあわせて行いたい。

座長：石川ひろの（帝京大学大学院公衆衛生学研究科 教授）

高永茂（広島大学大学院文学研究科 教授）

- 「医療場面における意志決定過程のコミュニケーション：会話分析的アプローチでみえること」
川島理恵（京都産業大学国際関係学部 准教授）
- 「機能分析（RIAS）によるアプローチ」
野呂幾久子（東京慈恵会医科大学 教授）
- 「コミュニケーションを変化させる：医師に対するコミュニケーション・スキル・トレーニングの有効性評価」
藤森麻衣子（国立がん研究センター社会と健康研究センター 室長）
- 総合討論

基調講演 シンポジウム 演題一覧

【シンポジウム2】

「医療情報をどう作り、どう届けるか～文書に関する研究アプローチ」

9月22日（日） 10:30-12:00

医学部1号館3階講堂（A会場）

インターネットや本などを介して伝えられる疾患や療養に関する情報の多くは、文書を使って伝えられる。識字率が高い日本において、文書で伝えることは当たり前のように行われることが多く、文書情報の評価やその他の研究アプローチは、これまで国内ではほとんど紹介されてこなかった。今後ますます高齢者が増え、日本語を母国語としない人々が増える中で、複雑な医療に関する情報を、どうわかりやすく伝えるかといったニーズは、これまで以上に高まっている。

本シンポジウムでは、医療において活用される文書情報の文章表現に関する研究、リーダビリティに関する研究、また意思決定の判断の助けとなる医薬品情報の提供の仕方についての研究を概観しつつ、医療や療養の意思決定の判断の助けとなる文書情報をどう提供し、利用者の理解や活用を促進することができるのか、一緒に考えていきたい。

座長：中山健夫（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻 健康情報学分野 教授）

高山智子（国立がん研究センター がん対策情報センター がん情報提供部 部長、
東京大学大学院医学研究科社会医学専攻 がんコミュニケーション学
連携講座 准教授）

- 「Shared Decision Making を促す患者向け医薬品情報」
北澤京子（京都薬科大学 客員教授）
- 「ヘルスコミュニケーションにおける方法論としてのリーダビリティ研究」
酒井由紀子（東京財団政策研究所 政策データラボ シニア・マネージャー兼研究員）
- 「「医療福祉ジャーナリズム学」研究の一事例～ディオバン事件と臨床研究法成立の関係に迫る～」
西村多寿子（プレミアム医学英語教育事務所 医療ライター・翻訳者）
- 「患者向け医療情報ではどのような文章表現がよいのか～がん情報作成経験より」
早川雅代（国立がん研究センター がん対策情報センター がん情報提供部
医療情報コンテンツ室 室長）
- 総合討論

基調講演 シンポジウム 演題一覧

【シンポジウム3】

「映像を創る、映像を分析する」

9月22日(日) 13:00-14:30

医学部1号館3階講堂 (A会場)

テレビは、多くの一般人にとって主要な医療・健康情報源のひとつであり、不特定多数の視聴者の知識、態度、行動に影響を与える。テレビ番組には、ニュース報道やドキュメンタリーなどのノンフィクションから健康バラエティ番組や医療ドラマなどのエンターテイメントなどがあり、その番組特性は多岐にわたる。各番組が取り扱う医療・健康情報が科学的根拠のある内容であり、医療に対する信頼を損ねない内容であることは、ヘルスコミュニケーション研究の重大なテーマである。しかし、映像を対象とした研究は日本では未だ確立しているとは言えない。

本シンポジウムでは、テレビ医療・健康番組の制作者、医療者の目線で医療記事の評価に携わっている医師、そしてテレビ研究の第一人者に、現代メディア環境における医療・健康に関する映像コンテンツの変遷や課題、研究方法についてご講演いただき、現状の課題と今後の方向性について議論する。

座長：河村洋子（静岡県立文化芸術大学文化政策学部 准教授）

加藤美生（帝京大学大学院公衆衛生学研究科 助教）

- 「「バズる」「心を動かす」映像のヒミツ～テレビ・ネットを中心に」
市川衛（NHK制作局チーフ・ディレクター）
- 「医療健康報道の質を探る—メディアドクターで記事を「科学」する」
渡邊清高（帝京大学医学部内科学 腫瘍内科、メディアドクター研究会）
- 「ヘルスコミュニケーションと映像メディア：映像分析の視点から」
伊藤守（早稲田大学教育総合科学学術院 教授）
- 総合討論